



大阪での仕事が終わって
京都・二条城祭りの情報を聞きました。
久しぶりに京都を訪れ、
猛暑日記録の続く中でしたが
半日のひとときを過ごしました。



京都市街の中にある平城で、
[徳川家康](#)の将軍宣下に伴う賀儀と、[徳川慶喜](#)の大政奉還が行われ、[江戸幕府](#)の始まりと終焉の場所でもある。

城全体が国の史跡、二の丸御殿が[国宝](#)に、22棟の建造物と二の丸御殿にある計954点の障壁画が[重要文化財](#)に、二の丸御殿庭園が[特別名勝](#)に指定されている。さらに1994年（平成6年）には[ユネスコ](#)の[世界文化遺産](#)に「[古都京都の文化財](#)」として登録されている。

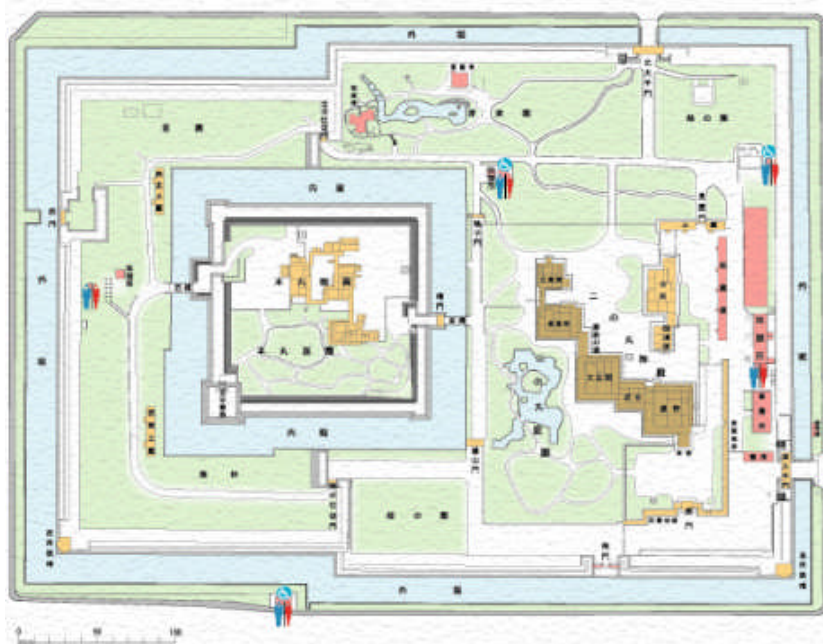
城は、敵の攻撃を防ぐために築いた防御施設のことで、3000にも及ぶ城郭が乱立していました。

しかしながら大阪夏の陣（1615年）直後の徳川幕府による「一国一城令」によって、その数は一挙に約170城まで減少し、その後は城の新築はもとより増改築さえも幕府の許可なしには一切できなくなってしまったため、ほぼ同じ状態で明治維新を迎えることになりました。

明治維新で武士の支配が終わると、明治新政府によって明治6年（1873年）城郭の廃城令が明示されて、明治7・8年頃には約三分の二の城郭が廃城となってしまいました。

その後、太平洋戦争においても大きな被害を被りましたが、戦後は、城の歴史的価値は見直され、またすぐれた観光資源として焼失した天守閣や櫓・城門などの再建・復興が相次ぎました。

全体図



東大手門



番所



国宝建造物

重要文化財建造物

管理施設等



二の丸御殿



二の丸の中心的建造物である二の丸御殿は、東大手門から見て正面の右斜め前方向に建つ。御殿は築地塀で囲まれていて、唐門は塀の南側にある。それをくぐると正面に二の丸御殿の玄関にあたる「車寄」(くるまよせ)が見える。二の丸御殿は手前から順に「遠侍」(とおざむらい)、「式台」(しきだい)、「大広間」(おほひろま)、「蘇鉄の間」(そてつの間)、「黒書院」(くろしょいん)、「白書院」(しろしょいん)と呼ばれる6つの建物が雁行に並び、廊下で接続され一体となっている。大広間の西側、黒書院の南側に日本庭園がある。遠侍の北側、白書院の東側には「台所」と配膳をするための「御清所」と呼ばれる建物がある。



唐門

切妻造、桧皮葺の四脚門でその前後は唐破風造となっています。彫刻がふんだんに使われています。

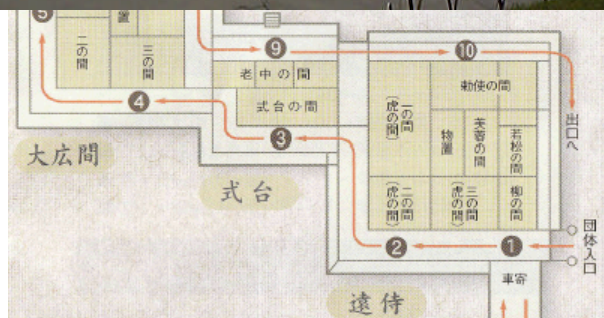


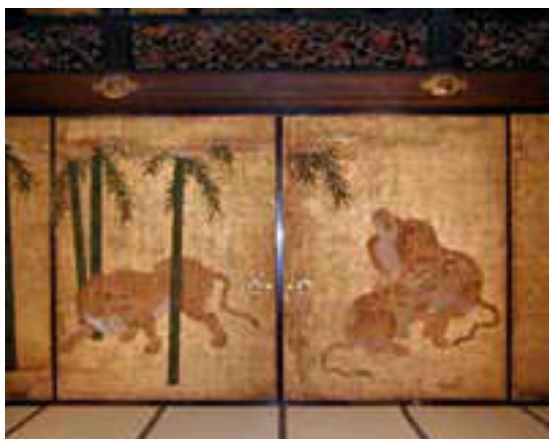
大政奉還の大広間



大広間

1867年(慶応3年)10月,15代将軍慶喜が,諸藩の重役らを集め,大政奉還を発表し,徳川幕府の幕を開いた歴史的な部屋





遠待の間

二の丸御殿内で最大の床面積をほこり、約1046.1平方メートルあります。一の間・二の間・三の間・若松の間・勅使の間等に分かれていて、城へ参上した大名の控えの間です。写真の部屋は遠待二の間で、虎の間とも呼ばれていて虎と豹(ひょう)の絵が描かれています。



式台の間

この間は、将軍が朝廷からの使者(勅使を迎えた対面所です。上段に勅使が座り、将軍は下段に座っていました。

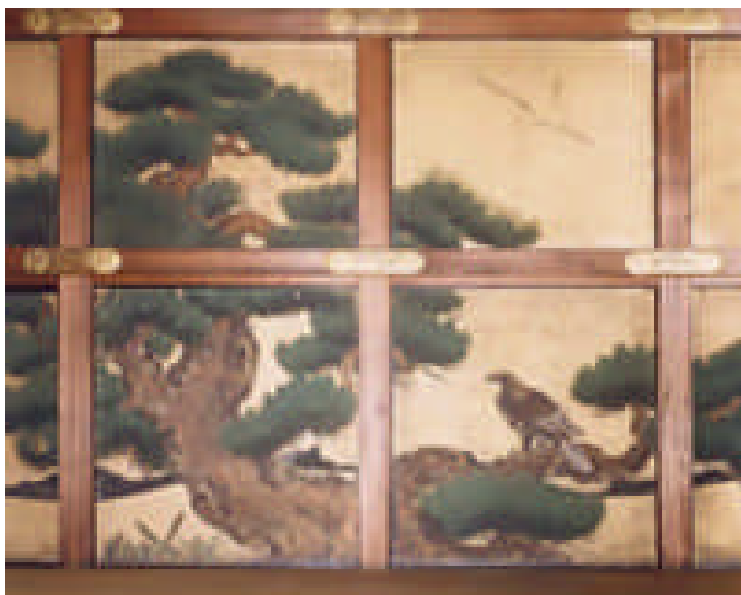


勅使(ちよくし)の間

参上した大名が老中職とあいさつを交わしたところです。将軍への献上品はこの部屋で取次がされました。襖絵(ふすまゑ)は狩野探幽(かのうたんゆう)が描いたものといわれています。

大広間四の間

将軍の上洛のときに武器をおさめた場所と云われています。襖絵は老松に鷹が描かれています。狩野探幽(かのうたんゆう)の作といわれています。



大広間一の間・二の間

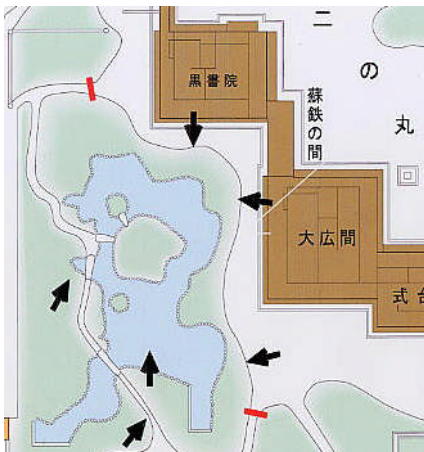
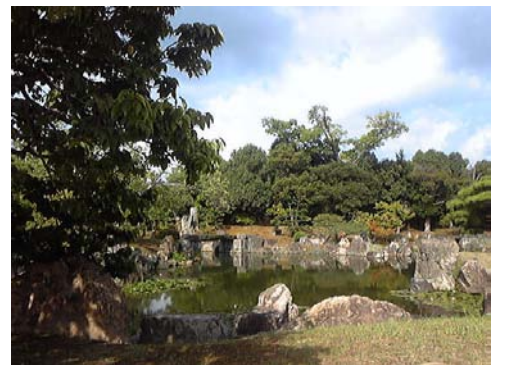
一の間は広さ48畳、二の間は44畳となっています。将軍が諸大名と対面した部屋で二の丸御殿の中で最も格式の高い部屋です。この部屋で慶応3年(1867年)10月、15代将軍慶喜(よしのぶ)が諸大名を集め、大政奉還(たいせいほうかん)を発表した歴史的な部屋です。

また二の間は後水尾天皇の行幸のときに、南庭につくられた能舞台の見所に使われました。

二の丸庭園



作庭の年代については記録や作風から推測して、慶長7年(1602)～8年(1603)頃(家康時代)二条城が造営されたときに、その建築に調和させて作庭されたものですが、寛永3年(1626)(家光時代)の御水尾天皇行幸のために一部改修を加えられたと考えられています。書院造庭園である二の丸庭園は神泉蓬萊の世界を表した庭園と言われ、また八陣の庭とも呼ばれています。後水尾天皇行幸当時の姿は、新たに増築された行幸御殿、中宮御殿、長局等に取り囲まれた中庭的な庭園としてつくられ、池の中に御亭を建て、池の中央に2つの島、4つの橋を併せ持ち、二の丸御殿大広間上段の間(将軍の座)、二の丸御殿黒書院上段の間(将軍の座)、行幸御殿上段の間(天皇の座)・御亭の主に三方向から鑑賞できるように設計されていました。



とくに、大広間からは庭園ごしに天守閣が一部望めたものと思われます。その後行幸の翌寛永4年(1627)から四半世紀にかけ、二の丸庭園を取り囲んでいた行幸諸施設は移築・撤去され、小堀遠州の作庭意図も薄れていきました。3代将軍家光の上洛以降、14代将軍家茂が上洛するまでの、229年間将軍不在のまま幕末を迎えます。その間事由は定かではありませんが、吉宗の時代に庭園の改修が行なわれました。



將軍の居間・寝室だったところです。内部の装飾も大広間や黒書院とは趣向が異なります。絵画は狩野興以(かのうこうい)または長信(ながのぶ)の作で、居間にふさわしい水墨山水画となっています。



本丸御殿



内堀に囲まれた部分16,800平方メートル(約5,200坪)を本丸と呼びます。

創建当時の本丸御殿は、二の丸御殿にほぼ匹敵する規模をもっており、内部は狩野派の障壁画で飾られていました。

また、本丸には五層の天守閣がそびえていましたが、寛延3年(1750年)落雷のため焼失、さらに天明8年(1788年)には市中の大火のため殿舎をも焼失してしまいました。

その後永らく本丸御殿の再建はならず、幕末に15代将軍慶喜の住居として、本丸御殿が建てられましたが、明治14年に撤去されました。

現在の本丸御殿は、京都御苑今出川御門内にあった旧桂宮邸の御殿を、明治26年から27年にかけて本丸内に移築したものです。



本丸御殿



本丸造営当初の庭園は、史料が不足している為、どのようなものであったか分かっておりませんが、二の丸庭園にひけをとらない庭園が存在していたと考えられています。しかし、天明8年(1788)の大火の飛び火によって本丸御殿、隅櫓、多聞櫓などが焼失。庭園も延焼して空地となっていたと思われます。幕末には、本丸内に徳川慶喜の居室が建てられ、庭園は茶庭風に作られました。

居室は老朽化のため明治14年(1881)に撤去、庭園も取り壊されて空地となりましたが、明治26年(1893)から明治27年(1894)にかけて京都御苑内にあった旧桂宮邸の一部が移築されて、枯山水庭園が作庭されました。

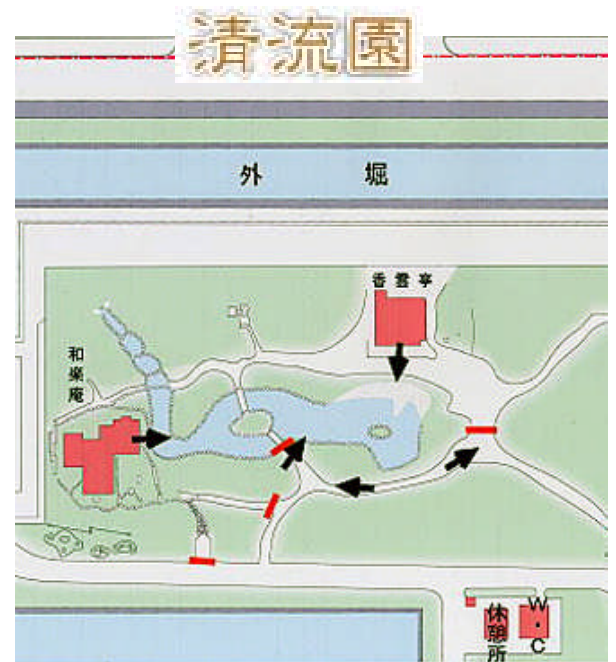


天守台

創建時の天守は、『洛中洛外図屏風』に城の北西部分（現在の清流園の辺り）に望楼型の5重天守として描かれている。この天守は慶長期に家康によって現在の二ノ丸北西隅に建てられたもので、3代家光の時に行われた寛永の大改修において淀城に移築された。これに代わり、新たに造られた本丸の南西隅に、前年に一国一城令によって廃城とした伏見城の天守が移築された（したがって、短い間だけ2つの天守が並び建っていた時期があるということになる）。この寛永期天守は、取付矢倉と小天守が付属する複合式の層塔型5重5階の天守であったが、1750年（寛延3年）に落雷で焼失して以来、再建されなかった。現在は、天守台のみが残る。



創建時(家康の時代)の二条城北部清流園地区は洛中洛外図屏風などから城内通路と天守閣の一部が存在していたと推定されます。しかし、寛永元年(1624)～同3年(1626)(家光の時代)にかけての二条城増改築の折、天守閣は淀城に移築されて空地となりました。寛永11年(1634)以降、同心(幕府の役人)の住まいが建造され、幕末まで建造物群があったことが確認できます(但し、一時天明の大火で焼失)。同心らの住まいは明治前期に撤去されたと考えられ、緑地に整備されたと思われます。大正4年(1915)には大正天皇即位式饗宴の儀の会場として利用され、饗宴施設等が増築されました。翌大正5年(1916)より城内の復旧工事が行われ、饗宴施設の一部は岡崎桜の馬場(現在の京都会館付近)へ移築撤去され、その跡地を有名な造園家小川治兵衛氏によって疎林式庭園に復旧されました。





<http://sankan.kunaicho.go.jp/guide/kyoto.html>

京都御所は、その古来の内裏の形態を今日に保存している由緒あるもので、現在のものは安政2年(1855年)の造営である。紫宸殿を始めとし、清涼殿、小御所、御学問所、御常御殿など平安時代以降の建築様式の移りかわりをつぶさに見ることができます。

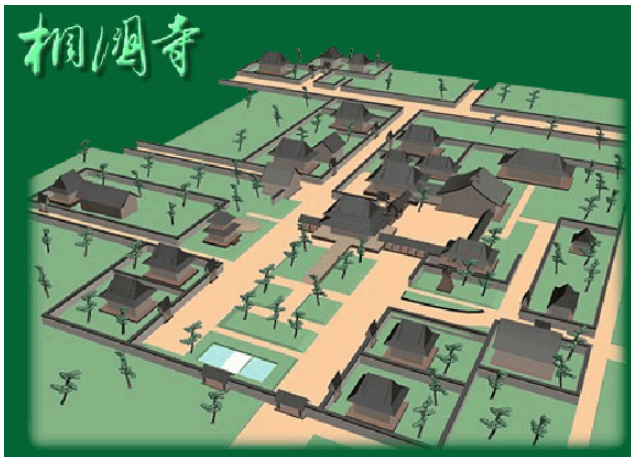


建礼門

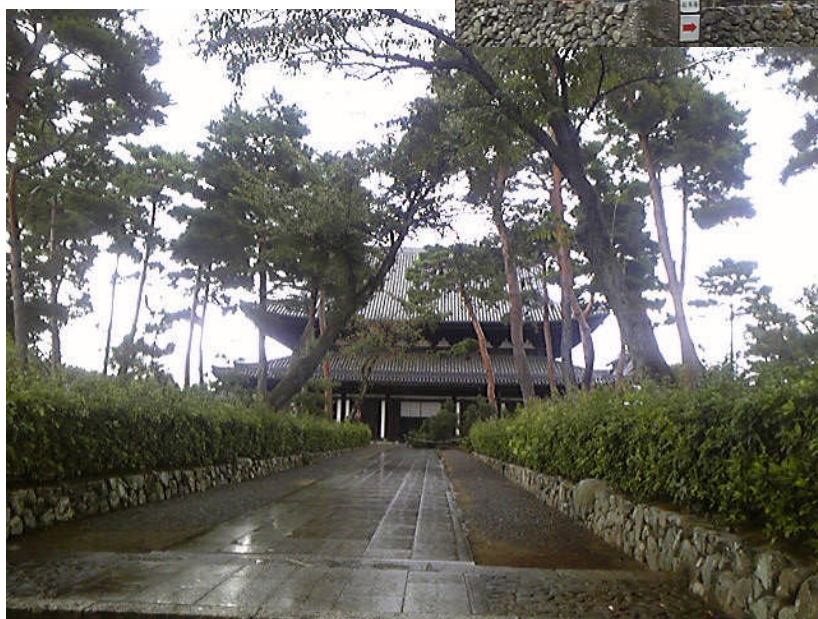


建春門





京五山第二位の名刹(メイサツ)、萬年山相國承天
 禪寺(マンネンザンショウコクジョウテンゼンジ)はい
 ま三門(サンモン)や仏殿(ブツデン)などの址がよく
 残っており、そこには松や檜が枝を交えていて在り
 し日の伽藍(ガラン)の壮麗さを偲ばせる。足利義満
 が創建し、至徳元年(1384)仏殿が落慶してから何
 回か被災と復興を繰り返し、最後に天明8年
 (1788)の大火で法堂(ハットウ)や勅使門(チョクシ
 モン)を残して中心伽藍も焼けてしまったのであった。
 その直前の安永9年(1780)に出た「都名所図会」に
 見られる姿は天明罹災以前のありさまをよく伝える
 ものと思われ、建築配置も現状とよく合っている。



瑞春院(ずいしゅんいん)

臨済宗相国寺派 塔頭 瑞春院



水琴窟も楽しめる「雁の寺」

瑞春院は京都御苑の北側にあり、相国寺の塔頭寺院。烏丸通下立売通を東へ入った相国寺西門から入り最初の寺院。

山門は通常閉ざされている。事前に電話予約をしていたので、脇口から庫裡へ向かう。掃除の行き届いた前庭を見ながら玄関に入る。迎えるのは通称「雁の寺」にふさわしい二羽の雁を描いた屏風。雁の寺の由来は、作家水上勉氏は9歳でここ瑞春院で得度し禅の修行に過ごしている。13歳のある日突然寺を飛び出し各地を遍歴しながら文筆活動が続ける。その後、出版した小説「雁の寺」がベストセラーとなった。この「雁の寺」の小説は瑞春院時代の襖絵をモデルとしたことから瑞春院は別名を「雁の寺」ともいう。今日も雁の襖絵八枚が本堂の雁の間に残っている。

庫裡で、簡単に寺の由来などの説明を聞き本堂へ向かう。本尊は、永享11年(1439)第六代將軍足利義教(よしのり)から寄進されたという阿弥陀三尊佛(阿弥陀如来像を中心に観音菩薩と勢至菩薩の三尊)が祀られている。





庭園は、南庭「雲頂庭」と北庭「雲泉庭」がある。雲頂庭は室町期の禅院風の枯山水庭園。



北庭「雲泉庭」は池泉観賞式庭園



庭園は、南庭「雲頂庭」と北庭「雲泉庭」がある。雲頂庭は室町期の禅院風の枯山水庭園。一方北庭は、庭園研究で文化功労授賞の村岡正氏(文化庁文化保護専門審査員)により作庭された池泉観賞式庭園となっている。また北庭には数寄屋建築の名工諸富厚士氏により表千家の不審庵を模して造られた茶室「久昌庵」がある。その茶室前の外待合の横にある水琴窟(蹲踞)は、小堀遠州の影響を受けた配下が伏見屋敷の庭に造った[洞水門\(水琴窟\)](#)の手法を取り入れて創作されたもの。竹筒に耳を寄せると地底の甕に落ちる水滴音の独特の音色が心を癒してくれる。

書院「雲泉軒」



茶室外待合の横にある水琴窟(蹲踞)

書斎の火灯窓から見る柚木灯籠と檜の木立



玄関に置かれた雁を描いた屏風



イベント情報

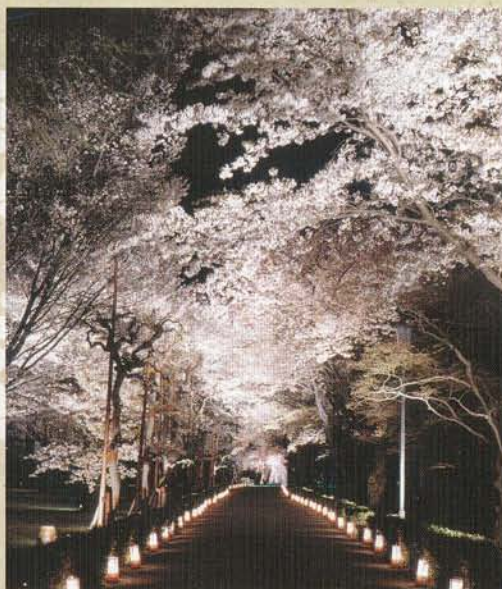
二条城では、年間を通じて様々なイベントを開催し、世界遺産・二条城をより身近に感じていただける取組を行っております。

普段と異なる二条城を是非ご堪能ください。

◆主なスケジュール

3月下旬～4月中旬	二条城ライトアップ
4月9日	観桜茶会
5月3日～5日	市民煎茶の会
9月下旬～11月下旬	お城まつり
10月下旬～11月初旬	市民大茶会
1月2日～4日	正月庭園公開

*日程は都合により変更又は中止になる場合がございます。



二条城ライトアップ

開城時間

- 入城時間
午前8時45分から午後4時まで(閉城午後5時)
- 二の丸御殿観覧時間
午前9時から午後4時まで

休城日

- 12月26日から1月4日まで
- 7月、8月、12月及び1月の毎週火曜日(休日の場合は翌日)



落書き等をしないよう文化財を大切に。

元離宮二条城事務所

〒604-8301 京都市中京区二条通堀川西入二条城町541
TEL:(075)841-0096 FAX:(075)802-6181

URL: <http://www.city.kyoto.jp/bunshi/nijojo/>

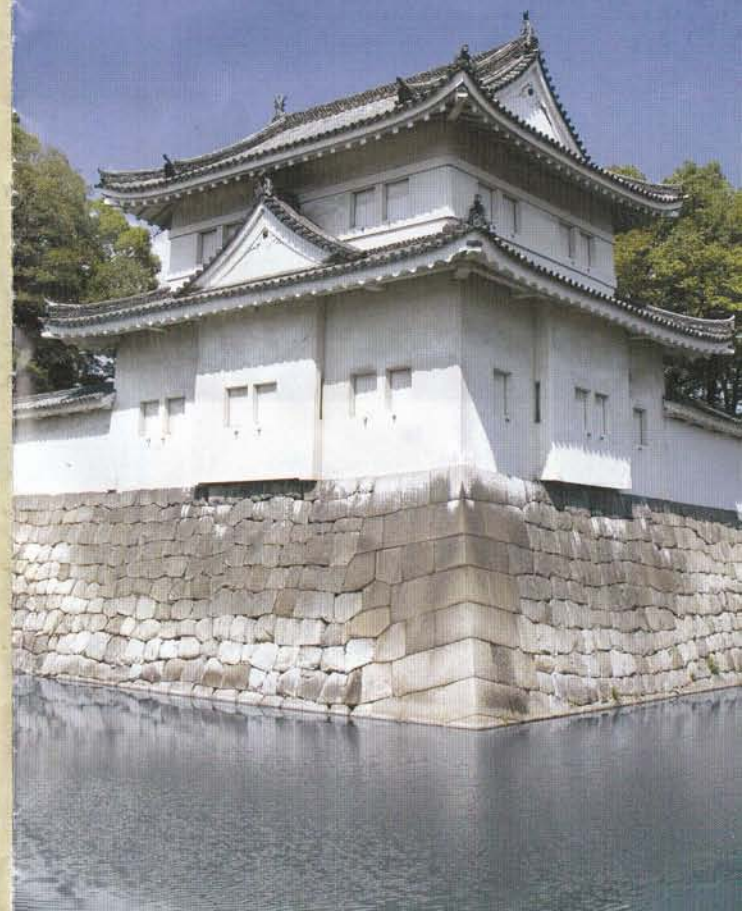
平成21年11月発行

発行:京都市文化市民局 元離宮二条城事務所 京都市印刷物 第214412号

世界遺産登録

元離宮

二条城





二条城は、1603年(慶長8年)徳川初代将軍家康が、京都御所の守護と将軍上洛の際の宿泊所として造営し、三代将軍家光が、伏見城の遺構を移すなどして、1626年(寛永3年)に完成したもので、家康が建てた慶長年間の建築と家光がつくらせた絵画・彫刻など、いわゆる桃山文化の全貌を見ることができます。

1867年(慶応3年)十五代将軍慶喜の大政奉還により、二条城は朝廷のものとなり、1884年(明治17年)離宮となりました。その後、1939年(昭和14年)に京都市に下賜され、1994年(平成6年)にはユネスコの世界遺産に登録されました。



唐門

施設の規模

- 総面積：275,000平方メートル
- 建築面積：7,300平方メートル(文化財建造物)
- 全 域：世界遺産及び史跡

城内の文化財

- 二の丸御殿(6棟)…………… 国宝(建造物)
- 東大手門等(22棟)…………… 重要文化財(建造物)
- 二の丸御殿障壁画(954面)… 重要文化財(美術工芸)
- 二の丸庭園…………… 特別名勝



黒書院一の間

ご 案 内

■ 車いすご利用の方へ

二条城では車いすの貸出し(無料)を行っております。外回り用は事務所棟入口にて、二の丸御殿内用は御殿団体入口にて受付しております。また、車いす対応の洗面所は、緑の園前、清流園休憩所横、西橋休憩所横の3ヶ所にあります。

■ 二の丸御殿のご観覧について

- ・ 二の丸御殿内は障壁画保護のため撮影禁止となっております。
- ・ 靴の履き間違いにご注意ください。(靴袋をご希望の方は、スタッフまでお申し出ください。)



二条城年表



西 暦	歴 史
1601(慶長6年)	徳川家康が西日本の諸大名に二条城の築城を課す。
1603(慶長8年)	二条城完成(現在の二の丸部分)、家康初めて入城。
1611(慶長16年)	豊臣秀頼、家康と会見。
1614・15 (慶長19年・元和元年)	城内で大坂冬の陣・夏の陣の軍議を開き当城より出陣。
1624(寛永元年)	三代将軍家光、城の拡張・殿舎の整備に着手。
1626(寛永3年)	本丸・二の丸・天守完成。現在の規模となる。 9月、後水尾天皇二条城行幸(5日間)。
1634(寛永11年)	家光、三十万人と称する大軍を率いて入城。
1750(寛延3年)	8月、雷火により五層の天守焼失。
1788(天明8年)	1月、市中の大火により本丸殿舎などが焼失。
1863(文久3年)	家茂入城(1634年三代将軍家光が入城して以来)。
1866(慶応2年)	城内において慶喜十五代目の将軍職を継ぐ。
1867(慶応3年)	10月、二条城に40藩の重役参集し、大政奉還の会議を行う。 二の丸御殿大広間において慶喜が大政奉還を発表。
1868(明治元年)	1月、城内に太政官代を置く(現在の内閣にあたる)。
1871(明治4年)	二の丸御殿内に府庁を置く(のち一時陸軍省になる)。
1884(明治17年)	7月、二条離宮となる。
1893(明治26年)	京都御所北東部にあった桂宮御殿を本丸に移築し、本丸御殿とする。翌年完了。本丸庭園(芝生)造成。
1915(大正4年)	大正天皇即位の大典が行われ大饗宴場を造営(現清流園の位置)。 南門ができる。
1939(昭和14年)	宮内省が二条離宮を京都市に下賜。
1940(昭和15年)	2月11日恩賜元離宮二条城として一般公開をはじめる。
1952(昭和27年)	文化財保護法の制定により、二の丸御殿6棟が国宝に、本丸御殿隅櫓など22棟の建物が重要文化財に指定される。
1953(昭和28年)	二の丸庭園が特別名勝に指定される。
1965(昭和40年)	清流園造成。
1982(昭和57年)	二の丸御殿の障壁画が重要文化財に指定される。
1994(平成6年)	ユネスコの世界遺産に登録される。
2005(平成17年)	築城400年記念 展示・収蔵館 開館。

本丸

本丸は、1626年(寛永3年)三代将軍家光の命により増築されたものです。もとは、五層の天守閣が高くそびえ壮麗を誇っていましたが、1750年(寛延3年)に雷火により焼失、また1788年(天明8年)には、大火による類焼で本丸内の殿舎をもなくしました。

現在の建物は、京都御苑内にあった旧桂宮御殿を1893年～94年(明治26年～27年)にわたり、ここに移し建てられたものです。この建物は、1847年(弘化4年)頃に建てられたもので、宮御殿の遺構としては完全な形で残っている貴重なものであり、重要文化財に指定されています。(内部非公開)

本丸御殿南側にある庭園は、明治時代に作庭されたもので、天守閣跡は、この庭園の西南隅にあります。



本丸

二の丸庭園(特別名勝)

二の丸庭園は、古来からの造庭術にしたがい、池の中央に蓬莱島、その左右に鶴亀の島を配した書院造庭園で、小堀遠州の作と伝えられています。庭は、1626年(寛永3年)、池の南側に後水尾天皇の行幸御殿が建てられた際に改造されたといわれており、主に大広間、黒書院、行幸御殿の三方向から見られるよう工夫されています。色彩に富んだ大小さまざまな石組にあらわれた力強さは、豪壮な城郭建築とよく調和しています。



二の丸庭園

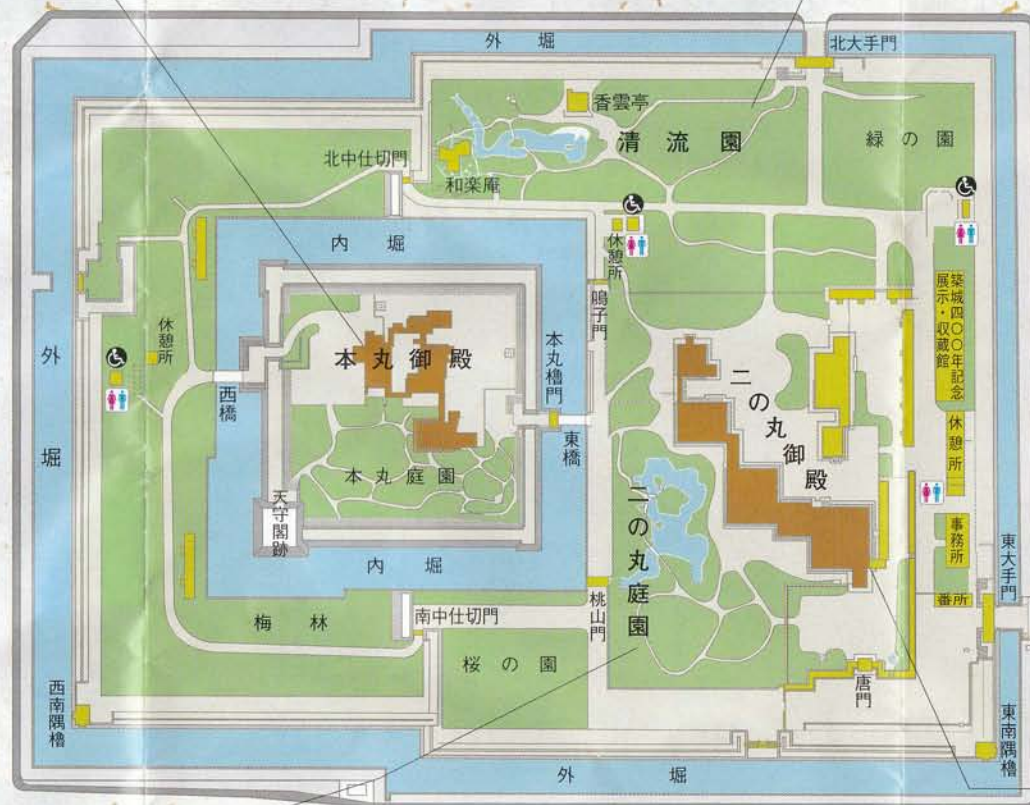


清流園

清流園

清流園は、江戸初期の豪商、角倉了以の屋敷から、建物の一部と庭石約800個を譲り受け、これをもとに二条城にふさわしく、雄大・明朗・風雅をモチーフに全国から集めた庭石300個と新たに茶室を加え1965年(昭和40年)に完成しました。

庭は、池泉回遊式の和風庭園部分と、芝生を主体にした洋風庭園部分からなり、面積約16,500平方メートル。園内には、香雲亭、茶室和楽庵があり、市民大茶会をはじめ二条城を訪れる国賓公賓の接遇場所にも利用されています。



二の丸御殿

二の丸御殿(国宝)

武家風書院造の代表的な御殿建築で、遠侍(とおざむらい)、式台(しきだい)、大広間、蘇鉄の間、黒書院、白書院の6棟が東南から西北にかけ雁行に並んでいます。建物面積は3,300平方メートル、部屋数は33、畳は800畳余りあります。各部屋の障壁画は狩野派の手によるもので、部屋の目的に応じて描かれています。また欄間の彫刻、飾金具、長押(ながし)に打たれた花梨斗形(はなのしがた)の釘隠しなどは、金飾あざやかに豪華を極めています。また、御殿東北には、台所・御清所(おきよどころ)があり、いずれも重要文化財に指定されています。

トイレ 多目的トイレ

①遠待 柳の間・若松の間

車寄を入った正面の2間は、障壁画により「柳の間」「若松の間」と呼ばれ、共に目付役が控え、来殿者の受付をした所です。

②遠待 一の間～三の間

3部屋に分かれており、城へ参上した大名の控室です。虎の間ともいわれ、障壁画は狩野門下の筆によります。

③式台 式台の間

参上した大名が老中職と挨拶を交わした所です。将軍への献上品は、この部屋でとりつかれました。

④大広間 三の間

部屋の正面上にある欄間の彫刻は、厚さ35センチの檜の一枚板を両面から透かし彫りにしたものです。また、部屋廻りの柱の上にある金具は花梨斗形の釘隠しといい、銅の地金に金張りしたもので、すべて手彫りです。

⑤大広間 一の間・二の間

将軍が諸大名らに対面した部屋です。特に将軍が座る一の間は、最も豪華に造られており、帳台構・違棚・床の間・付書院を備え、天井は、四方が丸く折り上がった「折上格天井」の中が、もう一段折り上がった「二重折上格天井」になっています。また、障壁画は、狩野探幽の作といわれています。

⑥黒書院

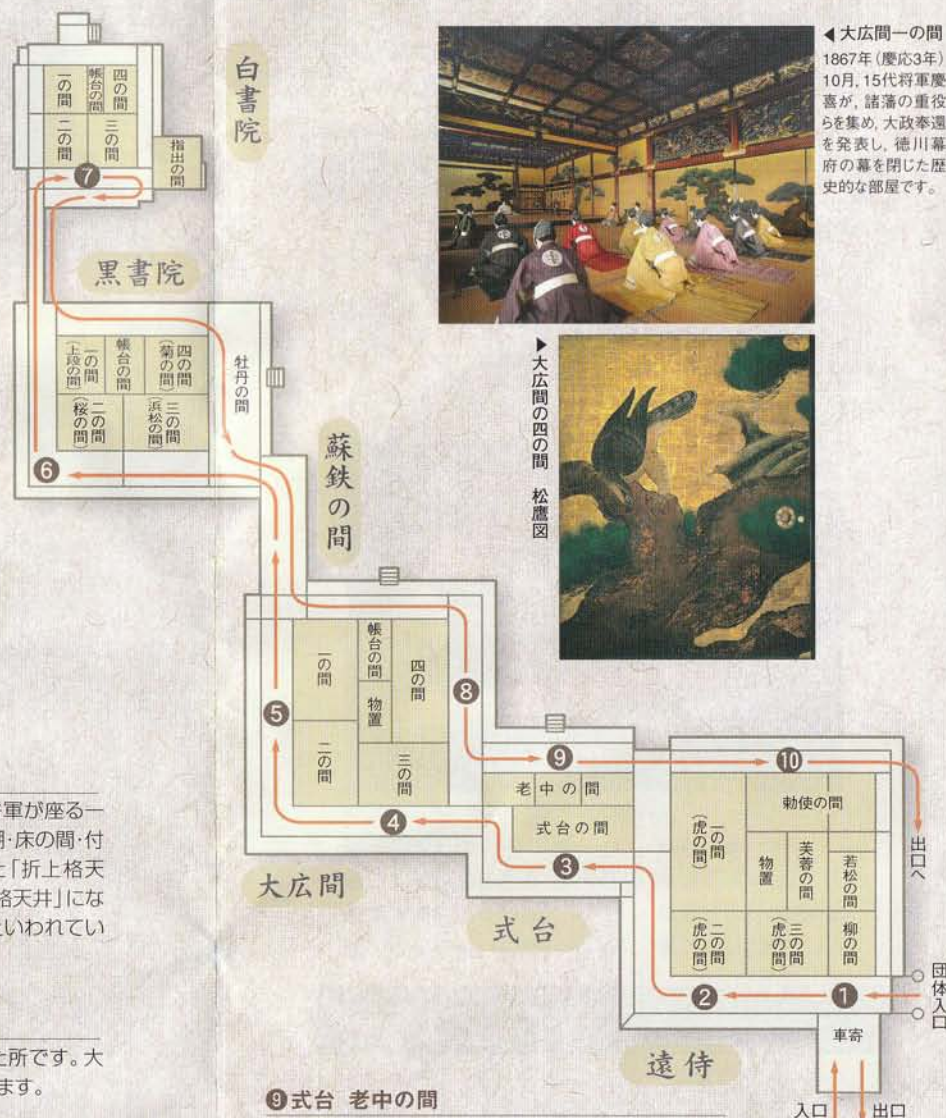
将軍と親藩及び譜代大名が内輪で対面をした所です。大広間と同じ書院造ですが、少し小さくなっています。

⑦白書院

将軍の居間と寝室です。内部の装飾は表御殿と趣を異にし、絵画も居間にふさわしい水墨画になっています。

⑧大広間 四の間

将軍上洛のときに、武器を収めた部屋といわれています。



⑨式台 老中の間

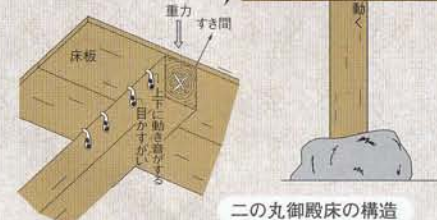
3部屋あり、老中が執務をした部屋です。一・二の間は芦雁図で、三の間は柳鷺図です。長押の上は白壁で質素にできています。

⑩遠待 勅使の間

遠待の東北の一角を占めています。将軍が朝廷からの使者を迎える時の対面所です。

二の丸御殿の廊下

二の丸御殿の床板を踏むと音が出るため、「うぐいす張りの廊下」といわれています。



二の丸御殿床の構造

二の丸御殿障壁画模写 ～文化財保存に向けた努力～

二の丸御殿障壁画は、17世紀の城郭建築とともに奇跡的に残された作品で、明治期のもも含めると総数は3000点を超え、そのうちの954面は昭和57年に国の重要文化財に指定されました。

二条城では、この貴重な障壁画を恒久的に保存するために、昭和47年から二の丸御殿の障壁画の模写を行っています。

専門的な技術・知識を持った人の手により、当時と同じようにできるだけ天然の材料を使い、伝統的な技術の保存と継承にも努めています。

完成した模写作品は、順次原画とはめ替えを行っています。

※現在大広間と黒書院及び白書院の一部の障壁画が模写障壁画とはめ替えられています。

築城400年記念 展示・収蔵館

～二の丸御殿障壁画と間近で触れ合える場所～

この建物は、模写とはめ替えた障壁画（原画）を収蔵し展示する施設で、ここでは今まで廊下からしか見られなかった二の丸御殿障壁画を間近でご覧いただけます。

また御殿室内の空間を再現できるよう工夫しており、二の丸御殿障壁画の特徴である巨大な画面構成と、荘厳な空間をお楽しみいただけます。

■開館時期
不定期

■開館時間
9:00～16:45
(受付終了 16:30)

■入館料
100円
(別途入城料が必要)



築城400年記念 展示・収蔵館